

特権的肉体論Ⅲ：口籠る民族的アイドル・張本勲論

林, 相珉

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/11042>

出版情報：九大日文. 11, pp.81-98, 2008-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

特権的肉体論Ⅲ

——口籠る民族的アイドル・張本勲論——

林 相 珉
Hayashi Akihito

I 「そうですねえ」と口籠る張本勲の主体

『パッチギ』（二〇〇五・一・二二封切）から二年四ヶ月、続編『パッチギ！ LOVE & PEACE』（二〇〇七・五・一九封切）は全国同時公開されている。そして、映画公開と同時に「緊急発売」された『民族の壁どついたる！』（二〇〇七・五、河出書房新社）のなかで井筒和幸監督は、「日本人と在日コリアンの人々のあいだに何があったのか」を「ありのままに語る事が大事」と語りながら、続編のテーマは「朝鮮人として名乗りたくても名乗れない」人々が朝鮮人であることを「はつきり名乗る」物語だと書いている。本名を隠して芸能界入りした主人公リ・キョンジャが、完成した映画の試写会で朝鮮人であることをカミングアウトする場面は続編の正念場でもある。そして、続編を「名乗って生きていこうと決意した人々のドラマ」と解説する井筒和幸監督が、「はつきり名乗る」理想のモデルとして登場させるのが、張本勲である。場面は海辺での宴会。宴会の途中、キョンジャは皆の前で芸能界入りを宣言する。その時、人々は「紅

白合戦なんか昨日がいなかったら、赤組も白組もあつたもんじやねえ」等、芸能界には多くの在日が活躍していることを強調する一方、「相撲取りもプロ野球も一流はみんなトンポ（同胞）なのに情けないよ」と本名を隠して活躍している人々を嘆く。そしてそれを受けて、おばさんの次のセリフが続く。

ねえ、日本ハムのチャンフン、張本勲みたいに嘘つかないで堂々と言ってくれたら私らも胸張って堂々と生きていけるのにね。

『パッチギ！ LOVE & PEACE』は一九七四年を描いたものであるが、当時の張本勲は確かに自分の出自を隠すことなく「堂々と」名乗っている。二年後の一九七六年には巨人に移籍して初めて出版された自伝『パット一筋』（一九七六・一〇、講談社）の著者紹介にも、「張本勲（本名・張^{チャン}フン勲） 昭和十五年、広島生まれ。国籍は韓国。韓国人であることを誇りに、人生を野球に賭け、単に「長嶋・巨人軍」の救世主というより、いまや王と並び称される日本プロ野球界のスーパースターの一人」と書いている。「韓国人であることを誇りに」というフレーズは、「パッチギ！ LOVE & PEACE」の中でも「嘘つかないで堂々と」名乗る張本勲像と一致している。しかし、注意すべきは、現在のわれわれに「韓国人であることを誇りに」「嘘つかないで堂々と」名乗る張本勲像が普遍化されてしまう瞬間、次の張本勲の口籠りは語れなくなるということである。口籠りは、巨人に

移籍して三年後に行われた李恢成との対談「われらが闘魂の日々」(「文芸春秋」一九七九・一〇)の中で具体的にみられる。対談の中で張本勲は、同民族による「両極端」の思いに悩まされていることを告白する。一つは自分を「思ってくれる方」の存在、そしてもう一つは「日本における一部の韓国人に対して非常に落胆した」ことである。「パッチギー LOVE & PEACE」における張本勲像はおそらく前者、自分を「思ってくれる方」によるフォーカスに他ならない。

問題は前者とは違う「両極端」の一方である。張本勲が「非常に落胆した」例として具体的に挙げているのは、一九七六年に起きたバット殴打事件をめぐる広島民団の反応である。同年四月一六日、巨人に移籍した張本勲は初めて故郷広島で地元球団広島カープと対戦する。ところが、九回裏のタッチアッププレーで両軍がもめ、試合後には巨人軍が乗ったバスを広島ファンが取り囲み、一悶着となる。その時、バスの最前列に座っていた張本勲がファンをバットで殴ったということで書類送検まで至る事件が起きる。これがいわゆるバット殴打事件である。張本勲が「非常に落胆した」と嘆くのは、事件後、マスコミが広島民団へ談話を取りに行くが、民団の団長、副団長が「張本がやったんなら刑務所へいれてしまえ」と言ったこと、そして無罪で不起訴処分になった後も「間違った報道をした報道陣」に何も働きかけない民団の態度故である。その上、民団からは「有名な」だから「寄付をたくさん払え、団費を払え」と非常に嫌な思いをさせられたと不満をぶちまける。だから「自分は日本人

になりたい、帰化しようとか考えたことがある」し、「十八のとき、はじめて祖国を訪れて一種の感動を経験しましたけれど、最近はそのような気持ちは薄れました」と同民族への「不信感」を口にする。そして、次のように続ける。

張本 ぼくは一人でワイワイやってきましたんですけど、正直な話、疲れましたね。

(中略)

李 北であれ南であれ、自分の祖国ですからね。また分断というやつは、いずれはつながるんですから、将来を確信を持って生きればいいんですよ。そのためにまた日本にいるわれわれが、スポーツ界、文学界を問わず、やることはこれから多いんじゃないでしょうか。

張本 そうですな。使命は大きいんですけど、もう疲れたいですよ。

李 いや、それはもう言わない。(笑)あなたが尊敬しているジャッキー・ロビンソン選手も引退後に、黒人のための公民権運動にたずさわったですからね。まあ、忍耐強くやってきたんだし、これからもやっていくよりしようがないというべきか、かえってそこにまた、新しい人生ってあるんじゃないのかな。

張本 ええ、四十年がんばってきたから、もう少しがんばれと言う人もいますしね。四十年がんばってきたから、もうええかげん、いいよと言う人もいますしね。(笑)

李 まあ、そういうわずに（中略）国が統一もしてないときに金田みたいな道を辿るのは、新たな悲しみをどうしても多くの同胞に持ち込むことになりすよ。映画界でも二世の李学仁監督が本名でいい仕事をしています。

張本 そうですすねえ、やつぱりその人その人の立場があるし、なんともいえないんじゃないですかね。たとえばいま成功してる人でも、ぼくらなんかの会合で会ったときに、会話を避けますよ。ぼくは逆に、隠してる人はその人の立場があるんだから、逆に隠してあげたほうがぼくらの愛情じゃないかと言っているのですがね。なかなかむずかしいんじゃないですかねえ。（二〇七—二〇九頁）

祖国と一体化することで得られる「感動」が「薄れました」と口にする張本勲に、李恢成は「いやつ、それはもう言わない」と「帰化」を必死に引きとめる。しかし、張本は「正直な話、疲れましたね」、「そうですすねえ。使命は大きいんですけど、もう疲れたですよ」、「そうですすねえ、やつぱりその人その人の立場があるし、なんともいえないんじゃないですかね」と、「そうですすねえ」で応答している。なぜ、張本勲はここまで口籠るのか。

本稿の目的は、民族的アイドルとして語られる張本勲が口籠る「そうですすねえ」の位相を明らかにすることである。具体的な作業としては、まず、野球人生の初期に行われた大江健三郎との対談に注目し、映画「あれが港の灯だ」（今井正監督、一九六

一年作、東映をめぐる二人の微妙な解釈のズレを明らかにする。その後、二人のズレが民族的アイドルという名のもとでいかに忘却されていくかを検討する。そして、最後には一九七〇年代から大阪を中心に始まる「本名を呼び名の運動」に張本勲が漫画として導入される時、張本勲の口籠る「そうですすねえ」が前景化する問題を考察する。

II 映画「あれが港の灯だ」と朝鮮人表象

「バッチギー LOVE & PEACE」における張本勲像は、帰化せず本名を「堂々と」名のる人として語られているが、李恢成との対談からも分かるように、張本勲は「隠してる人」を「隠してあげ」る「愛情」を持ち合わせている主体でもある。勿論、問題は「愛情」があるかないかではなく、なぜ、張本勲の語る「愛情」が前景化することなく、本名を「堂々と」名のる民族的アイドル面だけがクローズアップされるのである。「隠してあげ」る「愛情」が一時的なものだからであろうか。そうではない。たとえば、一九五九年に東映フライヤーズに入団し、新人王を獲得した野球人生の初期に、大江健三郎と行った対談「朝鮮の母は誇りたかき若者を育てた」（週刊毎日グラフ、一九六一・八・二七）にもその痕跡を確認することは出来る。

管見のかぎり、右の対談に言及した論文は二つほどある。一つは趙美京『叫び声』からみる在日朝鮮人像（『文学研究論集』二〇〇・六）で、もう一つは川口隆行「朝鮮人被爆者を巡る言

説の諸相——一九七〇年前後の光景——(Prolegomena IV (文学／教育4) 二〇〇三・七)である。前者は『叫び声』のモデルでもある小松川事件に注目し、事件当時の「大衆新聞メディア」報道との比較から大江健三郎の朝鮮人造型を考察したもので、後者は被爆者二世でもある張本勲を皮切りに戦後朝鮮人被爆者の語られ方を論じたものである。両者が用いる枠組みは異なるものの、戦後の国民国家を前提にした国籍の恣意性を疑わずに、張本勲を「アメリカ人」＝「外国人」と同一視する大江健三郎の朝鮮人観を批判している点で同型である。大江健三郎には在日朝鮮人がなぜ・いま・ここにいるのか、「近代日本と朝鮮の歴史の交渉の特殊性」への「想像力」が欠落しているということだ。両者の批判する文脈では、張本勲が帰化せず「民族的矜持を持ち続けながら日本で活躍するヒーロー」として評価されればされるほど、同化主義を批判する大江健三郎と同じ立ち位置に立たされることになる。

しかし、二人の対談を張本勲に焦点を当ててみると、意外に違う光景が見えてくる。対談は、最初、張本勲が広島で被爆した話から始まるが、すぐに朝鮮人としての野球人生へと移る。この後、大江健三郎は人間として、「一番スクスクと日本の中で精神的にも肉体的にもびるることができる」ためには、「日本人に同化しようとしたり、かくそうとしたり、というような形で、子供の時から教育されると、どうしても人間がゆがんで来て、スクスクとのびていけない人間に変わってしまう」(二〇頁)と語る。そして、その文脈から張本勲を持上げる。川口隆行は、

右の対談は大江健三郎の誉め言葉に「いささか困惑気味にも律儀にあいづちする張本」の間に「妙なコントラスが強調された」と指摘しているが、しかし、二人の対談における「妙なコントラス」は大江健三郎の誉め言葉に「いささか困惑気味」になつたからではない。張本勲が大江健三郎の言葉に「ええ」、「はーあ」、「はあ」、「そうですね、まあ……」と「いささか困惑気味」になるのは、映画「あれが港の灯だ」をめぐる解釈の相違からである。

対談の中で張本勲は映画「あれが港の灯だ」の主人公は元々自分が演じる予定だったが、時間の都合で「ダメ」になつたと語る。しかし映画を見て「思い当たる節もあ」って「よかつた」と評価する。大江健三郎は、この「思い当たる節も」にすぐ反応し、「というところのことですか」と問い詰める。張本勲は「思い当たる節」について以下のように語る。

張本 そうですね。結局、日本の人が、その青年を思つてたよりは、彼の、なんちゆうかなあ……日本に対する憎しみが、なかつたわけなんですよ、ね。でも結局、あの場合には、日本の人は裏切られたと、いうふうに思つたわけですよ、ね、船員たちは。(中略)でも本当は、そういうわけじゃなかつたわけですよ。だから、そういういい面をね、今井先生が出してくれたから、まあ、よかつたなア、と思つてますよ。(二〇頁)

野球選手の張本勲が、言葉巧みな大江健三郎を前にして多くの句読点で語ろうとする「いい面」とは、具体的にどのようなものだろうか。

映画「あれが港の灯だ」は、一九六一年当時、日本海の李ライン付近で多発した韓国警備船による日本漁船の拿捕事件を背景に、国籍で悩む木村の個人史をクロスさせた物語である。韓国籍を持つ在日の木村は、自分の国籍を隠して生活している。

そこへ、ある日、木村の国籍を知っている小学校の同級生・石田が現れる。石田の出現に、国籍がばれることを恐れた木村は仕事を辞めることを漁労長に伝える。しかし、漁労長は木村の母の手紙から事前に木村の素性を知っていて、他の乗組員達にも木村の「本名が朴という名前じゃけん」、「みんな、仲良うやつてくれや!」と取り計らってくれる。木村は、乗組員「一人一人の表情」に「悪意のある笑いは見当たらない」ことを確認して、引き続き船に乗り込むことを決心する。ところが、ある日、木村の乗っている「日の丸」は李ライン付近で韓国警備船Ⅱ「怪船」に遭遇する。と、同時に、「国と国」の政治問題は乗組員達の意識を操作し始める。乗組員の松村は「スパイが居ると」ご飯に「何入れられてもわからん」、「最初からあちらさんが乗つとるんじゃけん」と嫌味を言い始める。甲板の上では、松村の言葉を発端に「……」と沈黙する乗組員と「いざとなつたらみんなを売り渡して、国でハバきかすつもりか」と松村の肩を持つ土谷とに分裂される。どんどん近づく「怪船」に慌てふためいた「日の丸」は、不運にも、ペラに網が絡む。網を取

り除くために乗組員達は次から次へ海に飛び込むが、若手の浩が荒波に吞まれて上がつて来ない。次の瞬間、「怪船」から「威嚇射撃」が始まる中、木村はある「決意の様子で海底に消える」。そして、暫くの後、「浩の頸に腕をかけ」て海面に現れる。この光景に乗組員の二郎は思わず「感激の涙」を流す。張本勲がこの映画を評価するのは国籍お構い無しに流される「感激の涙」故であるが、それも束の間、「日の丸」には「怪船」から警備官が乗り込む。荒波で一人だけである。多勢に無勢、乗組員達は一人の警備官の「銃を叩き落し」、「わつと囲む」ところが、若い警備官は日本語が通じない。そこで石田は木村を呼びつける。

石田「おう木村、通訳して、お前!」

押し出されて木村、男と視線を合わす。瞬間、若い警備官は、ハツと顔色を動かすが、沈黙のまま凝視——木村も無言。突如、激しい銃撃音の断続——ぱつと、みんな床に伏す。一瞬、木村は警備官と折り重なるように身を伏している。

警備官「(故国語) この船はどうせ捕まるんだ。奴等をうまく引き渡せばお前は助けてやる。母国を裏切るようなことはしないだろうな」

(以下、日本語のスーパーを入れる)

木村「(動揺の色を示すが故国語で) 何故やたらに撃つんだ」
警備官「(同) 命令だから仕方がないね」

木村「(同) 殺しあうのは、嫌いだ！」

警備官「(同) そりゃそうだ。好きな奴はないよ」

木村「(同) 警備官なんかどうしてやってるんだ」

警備官「(同) お前が魚とるのと同じさ」

木村「(同) 家族いるのか」

警備官「(同) 親父が一人、百姓やってる」

木村「(同) みんな国じゃ、どうやってるんだ？」

警備官「(同) ラジオで日本の流行歌や浪花節なんかを聞

いとるよ」

木村「(同) まさか」

警備官「(同) ほんとだ」

木村「(同) ニヤリとしかける」

それをじつと見ている石田。松村、土谷たちが軽蔑の視線。

(永木洋子「あれが港の灯だ」、『年鑑代表シナリオ集 一九六一年版』

一九六二・一〇、ダヴィッド社、七七―七八頁)

最初、警備官の前に「動揺の色を示」した木村は、警備官の家族や日常を聞いている内に、意外と自分と変わらない日常を確認して「ニヤリとしかける」。この「ニヤリとしかける」顔が原因で木村だけを残し脱出した乗組員達は、「何やら向こうと話バしちよったけん」、「船バぶんどって国へ帰ったら、手柄じゃけんの」、「やっぱ、地金出しおった。生れが生れじゃ。奴だけとは思っちよったがの」と木村をのしることになる。張本勲が、今井正監督が朝鮮人青年の「いい面」を出してくれて

「よかつたなア」と評価するのは、乗組員達が批判する「生れが生れじゃ」という言葉には回収されない内面を表現してくれたからである。つまり、木村の「ニヤリとしかける」顔を国籍で線引きし「裏切られた」などと誤解するな、ということだ。

木村を同化主義批判から解釈すると、乗組員の「感激の涙」や意外と変わらない韓国警備官の日常は語れなくなるということである。

ところが、大江健三郎は「日本にいたる朝鮮の知識人はいつぱんに、あの映画はよくない」と注釈をつけながら、木村は「あたかも日本人化したがつている」と否定的に評価する。二人の解釈のズレから読みとるべきは、映画を捉える文脈がそもそも違うということだ。その文脈の差異は、必然的に映画のポイントの置き所に表われる。大江健三郎は木村の「日本人化」にポイントを置くが、張本勲は「日本人化」を一旦括弧でくくる。その根拠は「地方にいけば」「一般にうちの国民は貧しい」上、おまけに「貧しい人と豊かな人」の扱い方も「全然」違うからである。同化主義批判の論理では「貧しい人」やそれに準ずる弱い人間にさらなる差別をもたらすことになる。故に、張本勲は、木村の勇敢な行動と乗組員の「感激の涙」に焦点を当て評価する。

木村の「日本人化」を括弧でくくる張本勲の主体は、同化主義を批判する大江健三郎と同じ立ち位置どころか、大江健三郎の「近代日本と朝鮮の歴史的交流の特殊性」への「想像力」を批判する趙美京や川口隆行に近い。しかし、二人の対談で注目

すべきは、話題が張本勲の「おふくろ」に移る瞬間である。母から「韓国人」は「韓国人」として「胸を張ってなんせえ」と教育された張本勲は、大江健三郎から「立派なお母さんですね」と誉められ、つい、「韓国人である以上、なんぼねえ日本人として生きようとしてもね」、「だいたいそういうこと自体考えることが、おかしい」とまで言ってしまう。「日本人化」は「おかしい」という発言に焦点を当てると、張本勲も同化主義を批判する大江健三郎や「日本にいる朝鮮の知識人」と同じ立ち位置に立たされることになる。しかし、問題は同化主義批判者か否かではなく、一方では木村を庇いつつ、一方ではその木村を「おかしい」と語ってしまう張本勲の主体だ。二人の対談を張本勲から読むことで見えてくる光景は、張本勲を帰化しない民族的アイドルとして評価すればするほど、必然的に「貧しい人」やそれに準ずる弱い人間は無効化を迫られるということだ。

Ⅲ バット殴打事件と作動するカテゴリー

一九七六年に巨人に移籍した張本勲は、四月一六日に故郷の広島に凱旋し、地元広島カープと対戦する。そして、例のパット殴打事件は起きる。最初から最後まで「やっていない」と主張する張本勲はその鬱憤を次のように吐露する。

なぜぼくを集中攻撃するのかなア。ぼくは頭のテッペンから足の先まで広島県人ですよ。太田川で泳いで育ったんで

すからねエ。お前は憎い巨人だが広島県人だからガンバレ。くらの心があって暖かくみてると思つていたのに……。〔神聖なバットでファンを殴れるか〕、「週刊ポスト」一九七六・五・一四、三〇頁

「暖かくみてる」ことを期待した張本勲は、故郷の人々から拒否され、にもかかわらずその断絶を抱えつつ「ぼくは頭のテッペンから足の先まで広島県人ですよ」と訴える。ここで注意しているのは、バット殴打事件後、事件を想起し語る張本勲は意外と映画「あれが港の灯だ」の木村と似ていることだ。たとえば、荒波に吞まれた浩を救い出した後、乗組員達から「感激の涙」で迎えられた木村は、拿捕事件を境に一方的に国籍で線引きされ「軽蔑の視線」で見られることとなる。張本勲も木村同様、バット殴打事件を境に一方的に国籍で線引きされ「集中攻撃」されてしまう。そして、さらに類似しているのは、大江健三郎との対談の中で張本勲は、一方では木村を庇いつつ、一方ではその木村を「おかしい」と突き放している。その木村同様張本勲も、元々は庇ってもらえるはずの広島民団から「張本がやったんなら刑務所へ入れてしまえ」と突き放されてしまう羽目となる。木村を反復する張本勲は、国籍による断絶を抱えつつも「ぼくは頭のテッペンから足の先まで広島県人ですよ」と訴えるが、果して、張本勲の言説はいかなるカテゴリーに回収され物語化されるのだろうか。

そもそも、右の事件が多くの週刊誌や新聞の紙面を占め事件

として成立しえた背景には、張本勲の巨人移籍と密接に係っていることを忘れてはならない。一九七四年を背景にしている「バッチギ！ LOVE & PEACE」では、「日本ハムのチャンフン、張本勲みたいに嘘つかないで堂々と語ってくれたら私も胸張って堂々と生きていけるのにな」と語られているが、在日の「私ら」だけでなく、日本の「私ら」の張本勲になるのは一九七六年の巨人移籍以来である。パ・リーグからセ・リーグへの移籍とは、テレビのチャンネルをひねったら目の前に張本勲の顔が映ることを意味する。そして、それと同時に出版界では張本勲関係の出版物が増産され注目を浴び始める。巨人に移籍する前まではMVP一回、首位打者は七回も獲得しているにもかかわらず、自伝を含め一冊の書物も出版されていない。ところが、巨人に移籍するや否や、張本勲『バット一筋』（一九七六・一〇、講談社）、大島幸夫『不屈の闘魂 張本勲』（一九七六・一〇、スポーツニッポン新聞社出版局、LPレコード『張本勲・白球の詩』（一九七六・一〇、日本コロムビア株式会社）、半田威生作・林ひさお画『鉄人バットマン 張本勲物語』（一九七六・一〇、地産出版）、山下重定『炎の打者 張本勲』（一九七六・一一、恒文社）、張本勲・王貞治『不滅の巨人魂』（一九七六・一二、勁文社）等、多くの出版物が編まれることになる。そして、これらの出版ブームと同時に張本勲の個人史も新しく編集され物語化される。その物語形成の火付け役となったのが、例のバット殴打事件である。

事件後、直ちに作動するカテゴリーは差別と被差別という図

式を経由することで成り立つ民族論である。例えば、明治大学の鈴木武樹は「問題は、非人道的なヤジ」ですよ。張本が殴った殴らないは問題ではない。読売球団は、広島球場に、差別発言を取り消すように抗議すべきですよ。日本のプロ野球の歴史のなかで、スターの半分は張本と同じ在日韓国人でしょう。ただ、隠しているか否かだ。」（アサヒ芸能 一九七六・五・六、一五三頁）と書いている。鈴木武樹の言う「非人道的なヤジ」とは、試合前から広島カープのファンから「チョーセン、帰れ！」、「キムチーツ」、「強制送還させるぞ！」等と民族的人種的な差別をうけたことを指す。特に、この日は張本勲の晴れ姿を見るために母と兄が観戦に来ていたのである。張本勲の兄・張世烈は、ヤジるファンに「自分は張本の家族の者だが、ほかのヤジならともかく、民族的な中傷だけはやめてください」と頼むがそれもダメで、張本勲の母は「イヌムジャシイッ（なんとという人間か）、「息子がなんでこんな目にあわねばいけんのか」（大島幸夫「張本勲とその母―中傷のヤジは許せない！」、「サンデー毎日」一九七六・六・二〇、一一六頁）と憤り、途中で帰宅し寝込んでしまう。張本勲像はバット殴打事件そのものではなく、民族的人種の「ヤジ」に力点が置かれイメージが作られていく。

勿論、このような張本勲像はメディア側から一方的に形作られたものではない。張本勲自身も事件後、「しかし、こうして振り返ってみると、これまでの私を支えたものは、やはり血の意識、朝鮮民族としての誇りだと思うんです。物心がついた頃から、いろいろ迫害され、いわれてきた。（中略）それだけに、

地元広島であんな騒ぎに国籍の問題でヤジがとぶと、残念でな
りません」（張本勲、涙の告白「私の真実」、『週刊現代』一九七六・五・
一三、二九頁）と書いているように、「血」や「民族」という回
路で想起し物語っている。

さらに、ここに、母の物語が加わる。母の朴順分は張本勲
が巨人に移籍した一九七六年に、韓国子供児童福祉会から「立
派な母」に選ばれ表彰されることになる。表彰の理由は「日本
で三十四年前に夫と死別しながら、四人の子供を立派に育て、
特に韓国人としての誇りをもつようにし、また、張本選手の日
本への帰化を勧めるあらゆる誘惑を退けたこと」（『毎日新聞』一
九七六・五・九）が評価されたからである。しかし、ハンナ・ア
レントも指摘しているように、ある賞の受賞に「謝意を表明す
る」ことは、「われわれが話したり聞いたりする場を与えてく
れる世界と公衆に対する態度の枠内でのみ行動すること」を「き
わめて強く世界に対して義務づけ」（『暗い時代の人々』二〇〇五・
九、ちくま学芸文庫、一三―一四頁）られることを意味する。つまり、
「ぼくはソウルの名誉市民だけど、母の地位は、ぼくよりもつ
と重いと思います」（巨人軍張本勲選手の母 朴順分さんの誇り高き激
動の人生、「女性セブン」一九七六・七・二八／八・四、一九二頁）と語
る張本勲の言説は、賞が持つ「帰化」しない民族のアイドルと
いう文脈へと「きわめて強く」包摂されることになる。
それから張本勲の個人史も更新される。張本勲は「四歳の冬、
夕キ火を友達と囲んでいるところへトラックが不意にバックし
てきた。彼は押し倒されて火の中に右手を突っ込み、大ヤケド

を負った」（大島幸夫「張本勲とその母―中傷のヤジは許せない!」前掲、
一一八頁）経験がある。それが原因で小指と薬指が密着してい
る。事故である。ところが、この話はプロ入りして新人王を獲
得した一九五九年の段階では、「若き英雄張本の右手は、小指
と薬指とが密着してしまっている。これは、彼が不幸な原爆児
だったことを証明する永遠の火傷あとだ。」（『新人王になった原爆
児』、『週刊明星』一九五九・一一・八、六七頁）という風に書かれて
いた。指の密着は事故ではなく「原爆」ゆえんということであ
る。しかし、張本勲が巨人に移籍した時には、「夕キ火」によ
る事故ゆえんと更新される。勿論、問題は指の密着原因ではな
く事件を想起し語る説明原理の違いである。巨人移籍後の指の
話は「戦時下のことだ。一家は朝鮮人ゆえに、慰謝料どころか、
ついに治療費も支払ってもらえなかった」（張本勲とその母―中傷
のヤジは許せない!）前掲、一一八頁）と書かれているように、「朝
鮮人」故に医者にも診てもらえず、「朝鮮人」故にトラックの
運転手からは「治療費も支払ってもらえなかった」民族的差別
状況に力点が置かれ回想される。しかし、張本勲の野球人生が
「被圧迫民族」の「血」の勝利物語（張本勲―被圧迫民族の赫々た
るエネルギーの再爆発、『週刊ポスト』一九七六・七・一六、四一頁）と
して普遍化されると、「帰化」をめぐる次の発言は行き場を失
うこととなる。「パッチギ! LOVE & PEACE」が描いた一九
七四年に発言したものである。

話は別だが、ぼくも近々日本に帰化することを考えてるん

ですよ。これは野球から足をあらつてからのぼくの生活設計にかかりあることなだけど、金田さんが実業家の一面をもつてゐるなら、ぼくもその面で張り合つてみたい。(中略) ぼくがいま帰化を考えていることは、別に金田さんの真似てるわけじゃない。昔もいつたように「ぼく個人の自由な考え」からなんだ。(張本勲「わが怨敵金田監督との全イキサツを聞いてくれ」、「週刊ポスト」一九七四・五・二四、三二頁)

事務的に、非常に不合理な点が多々あるんですね。米國へ行く場合でも、日本からいつたん韓國に帰つたうえで、米國へ渡航手続きをせにゃいかん。(中略) また将来、子供ができれば、自分が(日本人に)罵倒されたり、虐げられてきた苦しさを体験させたくない、という気持ちもあつた。これは、一番深刻に考えたことでしたが……。 (帰化説をはじめ返した豪打V七の『血』—張本勲選手、「サンデー毎日」一九七四・一一・二七、四三—四四頁)

結果的に、張本勲は同民族や在日同胞の思い入れで「帰化」することを思いとどまるが、重要なのは、張本勲が「個人の自由」という言葉で語ろうとした諸問題が一時の「誘惑」として片付けられることだ。「子供」問題については、たとえば、同じくプロ野球選手の金日融^{キムイルユン}こと新浦寿雄も一九七六年の「日本人への帰化は、長男が生れた時に、彼の國籍をどうしようか考えたことを発端に」、「自分が味わつた不合理な扱いを息子に

味わわせ」ないことが「父親としての息子に対する愛情です……」(『ぼくと野球と糖尿病』一九九四・一〇、文芸春秋、六八頁)と書いている。新浦寿雄が、帰化は「子供に対する愛情です」と語る時、そこには現在形の「不合理」さになが子がはたして耐えることが出来るだろうか、という不安が潜在的に含まれているはずである。張本勲自身、巨人移籍後も子供のことになると、

帰化した人に対して、帰化しない僕らは逆にあたかき眼でみてやらねばならないと思うんですよ。(中略) 僕の気持はいまはつきりしています。いま僕が帰化しないのは、その必要がないからです。必要なときには帰化するかもしれない。自分の子どもには、僕が子どもだったときのような思いを味わわせたくない、これは僕の本當の気持ですよ。

(八木晃介「ネズミ色のチマ、チヨゴリ」、「月刊ペン」一九七七・一、二一—二五頁)

と「帰化」を口にする。すなわち、張本勲を「帰化」しない民族的アイドルとして評価すればするほど、張本勲自身が「個人の自由」という言葉で語ろうとした諸問題は捨象される仕組みになつてゐる。この矛盾を破綻することなく同居させるには、いかなる管理システムが必要だろうか。次は大阪を中心に始まつた「本名を呼び名の運動」に張本勲が漫画として描かれ教育される時、右の矛盾はいかに表象されるのかを見てみよう。

IV 「本名を呼び名のる運動」と漫画『張本勲●怒りの球譜』

一九八一年三月に発行された漫画『張本勲●怒りの球譜』（高
美中学校漫画研究会）は、四年後『在日韓国朝鮮人』（一九八五・一
二、三一書房）に所収されるが、その扉には以下の説明文が寄せ
られている。

中学に入学した日、将来はプロ野球の選手になって母さん
にラクをさせたいと書いた張本勲は『原爆手帳』を持って
いる唯一のプロ野球選手であった。そしてまた観客の中か
らの“チョーセン”という野次に対しても、堂々と胸を張
って、「俺は朝鮮人である」と言えるプロの野球選手であ
った。彼の生いたちを、野球人＝人間としての姿を、学校
教育・人権教育の一環として、大阪府八尾市にある高美中
学校漫画研究会が描き、作り上げたのがこの作品である。

（二〇五頁）

当時、漫画研究会を担当した篠原ユキオによると、『張本勲
●怒りの球譜』は同和担当の先生と「学校教育・人権教育の一
環」として作った一つで、大島幸夫『不屈の闘魂 張本勲』（前
掲）を原作としている。『不屈の闘魂 張本勲』のサブタイト
ル「反逆の球譜・張本勲」を少し修正し『張本勲●怒りの球譜』
としたのである。ところで、そもそも、なぜ、張本勲が漫画と
して描かれたのか。大阪市立田辺中学校教諭の金井清は、子供

に「差別の実態」を教える難しさを次のように書いている。

目の前にある現実、子どもたちが教師からきかされる旧
態依然たる「部落差別の実態」を否定している。もちろん
矢田に部落差別はあったし、いまも差別は存在しているこ
とはまちがいない。しかしいま子どもたちの目と体験から
つかむことのできる姿がないため、教師たちがいう「差別
の実態」は、子どもにはわからない。そこから当然に、教
師が「部落差別の実態を教える」ことは、教師自身が教え
こまれた過去の矢田部落の環境や生活、解同の運動の「成
果」を、子どもたちにおうむ返しに語ってゆく式の「お話」
になることはさけられないのである。（東上高志編『解放教育

教育支配の実態とたたかい』一九七七・八、部落問題研究所出版部、
一六五頁）

ここに現前化している問題は、世代交代による「目の前にあ
る現実」に見合う教育の困難さである。これは部落教育だけに
限る問題ではなく、大阪を中心に一九七一年七月に発足した「日
本の学校に在籍する朝鮮人児童生徒の教育を考える会」（以下、
「考える会」）でも事情はそう変わらない。杉谷依子によると、「考
える会」が発足する前には「大阪市同和教育研究協議会」（以下、
「市同教」と「大阪市外国人教育研究協議会」（以下、「市外教」）
が「人権教育」を支えていた。ところが、一九七一年の大阪市
立中学校長会による、いわゆる「朝鮮人迷惑論、民族差別」と

いう文章（「外国人子弟教育の実態と問題点」、『研究部のあゆみ』一九七一、大阪市立中学校長会研究部）がキッカケになって「考える会」は発足する。「考える会」は運動団体として「現在、日本の進

学体制が要求する学力を押しつけ、それにあわない子どもを「落ちこぼれ」と切り捨ててはいないだろうか」という反省から作られた会である。杉谷依子も生徒を指導する困難さについて、

当初、教育現場から一番強く要求されたのは教材づくり、「何をどう教えるか」であった。はじめ、私たちは、自分がこの問題を学びはじめて一番ショックをうけた、三六六年間にわたる植民地支配や、関東大震災などの話を子どもに教えようとした。「市外教」作成の最初の自主教材も七五年の「関東大震災と朝鮮人虐殺」であった。これらの学習では、子どもたちは沈みこんでしまった。教師も生徒も「朝鮮にふれるのは重たい、しんどい」といった気持ちにもなった。（「考える会」の歩み、『むくげ 復刻版―大阪の在日朝鮮人教育10年の歩み―』一九八一・一、亜紀書房、三三頁）

と書いているように、「考える会」でも部落教育同様「子どもたちの目と体験からつか」める「教材づくり」が要求されていたのである。世代が違う子供に「植民地支配」や「関東大震災」の話は「しんどい」ということだ。そこで、同時代の等身大である張本勲が召還されるわけであるが、もう一つ、「考える会」が実践の軸にすえた「本名を呼び名のる運動」との関係がある。

杉谷依子は大阪における「本名を呼び名のる運動」の意義について次のように書いている。

「本名を呼び名のる」教育は、授業の中で正しい朝鮮を教え、学級集団づくりを通して、朝鮮人の子、部落の子、障害をもつ子など、さまざまな重荷を背負って生きている友人们の立場を理解し、助け合える仲間をつくることである。その中で朝鮮人の子は、朝鮮と向き合い、差別に負けない強い人間に育つていく。（「考える会」の歩み―前掲、二五頁、傍点は論者）

「本名を呼び名のる運動」が最終的に目標とする人間像は「朝鮮と向き合い、差別に負けない強い人間」である。そのような文脈から「チョーセン」という野次に対しても、堂々と胸を張って、「俺は朝鮮人である」と言える「張本勲は好都合な人物だったのである。

それでは『張本勲●怒りの球譜』における張本勲の少年時代の表象を見てみよう。二〇九頁右、友達と遊んでいる張本。その時、朝鮮服チマ・チヨゴリを着た母から「勲、早く帰っておいで！」と呼ばれる。その声に「あ、お母ちゃん」と答える張本。二人が親子関係であることを察した友達は、たちまち、おどおどした顔に一変。その後のト書き「当時、朝鮮人であることを知られるのを ひどくいやがる人々がたくさんいた。（中略）そんな中で、勲は いつも民族の誇りを持って行動するたくま

しい少年だった。」と続く。同二〇九頁真ん中、穴の空いた帽子にズタズタのズボンを着た張本。友達から「勲、お前、そのかつこうなんかならんのか?」「おれ達のチームで野球やつてるように見えんのはお前だけやで!」と馬鹿にされる。しかし「うちは貧乏やから そんなもん買ってもらえへんのか!」と口をへつこ悪うても、野球がうまかつたらエエやないか!」と口をへの字にして「今にみとれ!」(二〇九頁左)とひるまない張本。二一〇頁右、グラウンドの使用で他校ともめる張本。他校の生徒から「だまれ、チヨ―セン!」と言われて瞳孔が開き、脳天に稲妻が直撃。その後、張本、切れる。しかし、切れたのは張本だけではなく、「ガツ」という音とともに相手の頭も、切れる。このような「暴力事件」と関係して作られたイメージで「広商からもマーク」され、結局、大阪の「浪商」に転校することとなる。しかし、そこでも「ごんた」な負けん気」はひるむことを知らない。

二一二頁左(図1)、「浪商を軽う見たら痛いめにあうで!」という先輩達の挑発的な言葉に、張本、上着のボタンを外しながら「二発までは、だまってなぐらしたる。三発めからは借りは返したる。そのつもりで来い!」と「売られたケンカ」を買って出る。先輩を相手に火花を散らしながら、睨みつけ合う張本。その瞬間、先輩の額から二粒のびびり汗。そして、張本が上着を半分脱いだ時、これにはもう相手にならないと察したのか「えらいまた ごんたなやつぢやなア…」とおどおどの冷汗。そしてこのような「負けん気」が「彼自身を甲子園から



図1 『張本勲●怒りの球譜』(212頁左)

遠ざける原因」となると同時に、野球部からの「除名追放」にもつながるのである。

少年時代の張本勲は、いかなる差別や不条理にもひるまない「強い人間」として表象されている。「売られたケンカ」なら相手は誰だろうが「二発までは、だまってなぐらしたる。三発めからは借りは返したる。そのつもりで来い!」と買って出る人間である。このような張本勲は「考える会(勿論「市外教」も「市同教」も)が理想としている「差別に負けない強い人間」とびつたり符合する肉体の持主であることは言うまでもない。しかし、ここで注意すべきは、張本勲はとにかく精神的にも肉体的にも「強い人間」であることだ。「売られたケンカ」はいつでも買って出た人間だ。勿論、このことが張本勲の個人史なら

何も問題にはならない。しかし、張本勲Ⅱ「強い人間」という個人史が「本名を呼び名のる運動」という機構を通して全域化される瞬間、その全域化と逆行して「本名を呼び名のる運動」の趣旨に還元されない価値及び意義は、希薄化・無効化を迫られることになる。

V 希薄化・無効化される日常

それでは、「強い人間」を育成する「本名を呼び名のる運動」が全域化すると、いかなる日常が希薄化・無効化を迫られるだろうか。たとえば、「考える会」の機関紙である「むくげ」（創刊号、一九七一年・一七）には、大阪の日新高校の朝鮮文化研究会（以下、朝文研）が書いた創作劇「サラム（人間）」（一九七八・一二・二〇、五四／五五号）が掲載されている。日新高校の朝文研顧問の西野栄和によると、この創作劇は一九七八年の文化祭の時、「在日朝鮮人生徒」たち自らが「本を調べ、他人にわかるように描いたものである。西野栄和は上演後の観客達の反応や感想を次のようにまとめている。

“オレと思いは同じじゃ” “あたしも同じこと思つた” “私たちの思いを代表してくれてありがとう” “朝鮮人をかくしてやることは本当の友情じゃあないんだ” “ナ”。何といつても、最後の本名宣言は圧巻でした。それぞれ、トチつたり……でしたが、せりふの中にはないだけ

に、更に心を動かされました。劇の最後の本名宣言は、私たちにとつて予想していいことでした。文化祭後更に、この本名宣言をした生徒に加えて、一クラス二〜三名が本名宣言をし、本名にかえ、他の朝鮮人生徒一クラス二〜三名が、自分は朝鮮人であることをロングホームルームで表明し、朝鮮人問題について話しあうクラスが相つぎました。

（二頁、傍点は論者）

次から次へと続く「本名宣言」。「本名を呼び名のる運動」が全域化すると、「本名」を「呼び」「名のる」あり方も同時に変化し始める。つまり、「朝鮮人」である友達「本名」を「呼ばずに」「かくしてやることは本当の友情じゃあないんだ」という知覚形式が発生する。そして、このような知覚形式が運動の理念という名で一般化すると、次のような人間の希薄化・無効化を迫る。

（朝文研一同、舞台にならぶ）（朝文研副部長、中央に出てきて）
／【朝文研副部長】今、これで朝文研の劇はおわつたんですけれども、（中略）この劇をやった者の中にも、まだ本名を使っていないトンムがいてたんです。けれども、そのトンムたちもね、新たにこの場を借りてね、本名宣言をしたいとね、いつているんです。ちょっと聞いてください。（拍手）
／【キムポヨギ】この劇をしてから、何かしら、本名をかくしてたら、うしろめたいような気がして、本名を名のる

ことにしました。キムポヨギです。よろしく。(拍手)／(中略)／(二年生のトムがモジモジする。会場から「オーイ、ガンバレヨ」"高校生もなつてそんなはずかしいことあるか"のアボジの声、と拍手)／【チヨンヘンシン】本名、ボク、チヨンヘンシンといます。よろしく。(拍手)(「サラム」前同、一六七一七頁)

テンポよく「堂々と」本名宣言する「キムポヨギ」。ところが、一方の「チヨンヘンシン」はただ「モジモジ」するだけである。その「チヨンヘンシン」に向つて会場から「オーイ、ガンバレヨ」という声援、そして「高校生もなつてそんなはずかしいことあるか」と「アボジの声」が飛んでくる。そして、会場に巻き起こる「拍手」。次の瞬間、「チヨンヘンシン」はみんなに温かく見守られる中、かろうじて「本名、ボク、チヨンヘンシン」といいます。よろしく」と本名宣言をする。何故、「チヨンヘンシン」はここまで「モジモジ」するのか。恥ずかしいからだろうか。そうではあるまい。現に、舞台に立つて「四〇分あまり」、朝文研「部員C」を演じきつたのである。そして、劇の中では「やつぱり、朝鮮人は、朝鮮の名前使わなあかんで、なんぼ日本に住んでるから言うても、俺ら、在日朝鮮人は、朝鮮人らしく生きていく必要あると思うで」とすでに本名宣言をした生徒に設定されているのである。さらに、「モジモジ」する「チヨンヘンシン」に飛んでくる「アボジの声」が物語るの、家族の中では本名宣言についてはもう話し済みということ

であろう。それなのにあの「モジモジ」である。張本勲なら「二発までは、だまつてなぐらしたる。三発めからは借りは返したる。そのつもりでこい！」という気迫で「堂々と」本名宣言出来たはずだ。しかし、「チヨンヘンシン」の「モジモジ」が物語るのは、「弱い人間」の現実である。「売られたケンカ」ならいつでも買つて出る張本勲とは裏腹に、「チヨンヘンシン」は、ただ、「弱い人間」なのである。「弱い人間」である「チヨンヘンシン」が本名宣言出来たのは、たまたま「オーイ、ガンバレヨ」という声援や「アボジの声」、そして「拍手」に包まれた環境に恵まれたからである。しかし、もしも、環境に恵まれない第二、三の「チヨンヘンシン」はいかなる現実を歩むことになるのか。その様子が窺えるのが、卒業生「P」による手紙「本名で生きて―教え子に聞く 教え子の報告V」(「むくげ」一九七七・一〇・三一)である。

「P」は手紙の冒頭で「何か先生方に訴えたい」という気持ちからいながら、さて、「何を、だれに」と考えとなかなかまとめて言にくいものです」と書いている。その理由について「P」は、「大阪市立の〇中学」では「朝鮮人生徒が全員本名(日本読み)で通学することになってい」る。それに先生の中には「授業の中で朝鮮問題にふれる先生」もいたことから、「学校が生徒を守ってくれるという期待感というか、信頼できる場」であった。「P」の言う「信頼できる場」とは、まさに「チヨンヘンシン」の環境と相通するものに他ならない。ところが、中学を卒業して進学した「大阪市立K高校」では、事情が丸つ

きり違う。先生達は「朝鮮人問題」には一切触れないし歴史を歪曲する「無責任な先生」もいる。結局、「先生方の理解と協力が無いのが最大の原因」で朝文研の部員は「P」一人になっ
てしまう。そして、その「P」が卒業してからは朝文研も「つ
ぶれほした」のであるが、たまたま「今年の同窓会」に出席し
た「P」は、先生に「今年の朝鮮人教育の対策にはどんなもの
があるのですか」と聞く。少し「ほろよい」の先生曰く、

顔を見たら、すぐそれや、まだそんなこというてるのか(中
略)おまえ、そんなこと言うんやったら、よそへ行ったら
ええねんやろ、どこにそんな学校あるんや。Kやめて、ど
こかへ行ったらええねん、なんでおるんや。(十二頁)

と卒業した「P」を「どなりちらす」のである。根負けした「P」
は手紙の最後を「これが、現実なんですよ先生……」と締めく
くる。「P」の手紙から分かることは、同じ大阪でも学校が違
えば「朝鮮人問題」への学校や先生の意識や取り組み方も区々
だということである。そして、もっと深刻なのは「本名を呼び
名のる運動」が全域化すると同時に内なる差別も全域化するこ
とである。

たとえば、在日の生徒が一人いるかないかの「在日朝鮮人
過疎地域」―四国の普通寺市に住む申義雄は、子供を岡山にあ
る朝鮮学校に入学させようと決心した頃、「大阪に住む在日朝
鮮人の人権活動家」(傍点、原文のまま)から「こどもを地域の学

校に通わせずに、わざわざ岡山の朝鮮学校に入れるとはふとど
きせんばん」と「間接的に」批判されたと言う。申義雄は「大
阪に住む在日朝鮮人の人権活動家」に向って「怒り」をこめて
次のように書く。

なぜ、腹が立つかと言うと、まず、おそらく香川の状況も
知らないで発言しているからである。大阪は在日朝鮮人が
最も集中しているところで、その気になれば民族文化に接
することができる。(中略)それに比べ、普通寺市はどうか。
香川県在住の在日朝鮮人は約一二〇〇人、僕たちが住む普
通寺市では人口三万八〇〇〇人のうち、二〇人足らず、日
本全国、差別は「平等」になされているといつても、在日
朝鮮人が集中するところよりも過疎の地域にいるほうが心
細いに決まっている。(中略)こんな所で、こどもを地域の
学校に入れば、おそらく普通寺市でたった一人の在日朝
鮮人学生ということになるだろう。多少、のほほんとでき
る所から、心細い思いにさせられる所にいる者に対して無
責任な発言は謹んで欲しい。(金永子・申義雄「瀬戸大橋を渡っ
て」、「ほるもん文化」一九九・二、一七〇―一七一頁)

申義雄が「怒り」をこめて「大阪に住む在日朝鮮人の人権活
動家」を批判する理由は、差別はどこでも「平等」だという論
理を「在日朝鮮人過疎地域」にも無差別的に当てはめようとする
からである。申義雄が「大阪」を「のほほんとできる所」と

皮肉いっばいこめて書く時、そこには「在日朝鮮人過疎地域」故に抱え込まざるを得ない「心細い思い」があるはずである。

申義雄が抱く「心細い思い」を張本勲なら「二発までは、だまってなぐらしたる。三発めからは借りは返ししたる。そのつもりでこい！」と正面衝突出来るかも知れない。しかし、張本勲自身も子供が心配で帰化を考え続けていたことを想起すべきだろう。そう考えると申義雄の言う「心細い思い」とは、「チヨンヘンシン」の「モジモジ」や「P」の語る「現実」と同じ根っこから発生するものとして捉えるべきである。

もう一度、漫画『張本勲●怒りの球譜』に戻ろう。場面は一九七五年一〇月、張本勲が監督兼選手として「日本プロ野球韓国チーム」を結成し野球親善のために韓国に出かけた時である。在韓中、テレビに出演した張本勲は、アナウンサーから「なぜ、あなたが「カネダ・ヒョン」(金田の兄さん)と呼ばなければいけないのですか」と質問される。その時、張本勲は在日の「複雑」さを説明するために「ある選手のこと」を思い出す。「ある選手」とは、遠征チームのメンバーに「どうしてもはずせないはずしくない選手」で張本勲はその選手にメンバーに加わることを勧める。ところが、その選手はすでに「帰化」していて「張本さん!」「オレの帰化は、女房も子どもも知らないんだ(中略)オレは、弱い人間かもしれないが、ひきょうと思ってくれるナ。」(二二三頁左、図2)と断られる。

張本勲は、黒く塗られた顔無し顔のビクビクを思い出し「隠さねばならないいんな事情の人がいる」、「隠す人がいたら、



図2 『張本勲●怒りの球譜』(222頁左)

守ってあげる」(二二三頁右、べきだとアナウンサーに強く訴える。漫画の「守ってあげる」描写は原作に忠実に従ったもので、当時の張本勲の考え方もあった。しかし、「守ってあげる」張本勲は必然的に「本名を呼び名のる運動」と拮抗せざるを得ない主体である。「差別に負けない強い人間」を目標とする運動は、「守ってあげる」発想を否定する立場だからである。ところが、この矛盾を回避する方法は二つほどある。一つは、金一勉のように「隠す人がいたら、守ってあげる」発想を「愛態同情」と皮肉りながら、張本勲の「守ってあげる」、「愛情」には、一切、ふれないことである『朝鮮人がなぜ「日本名」を名の

るのか」一九七八・五、三「書房」。そして、もう一つは、矛盾自体を生み出した国家にだけ責任を取らせる方法である。右の漫画は後者を選択している。つまり、張本勲の語る「守ってあげる」「愛情」は二三三頁右、「隠したい。そういう気持ちに追いやる」。

「隠させる側」の差別性を我々は真剣に見つめ直さなければならぬ」と横滑りしていく。張本勲の「守ってあげる」「愛情」は「怒り」に変身、その矛先を「隠させる側」である日本国家だけに向わせる。その瞬間、「本名を呼び名のる運動」が孕む矛盾や運動自体が排除してきたものへの責任も脱臼される。そして、顔無し顔のビクビクが語る日常は無効化され、「隠させる側」の差別性」と戦う民族的アイドルとしての張本勲だけが神聖化されることになる。

二〇〇七年一〇月五日、張本勲は韓国政府が開催する「世界韓人の日」(二〇〇七年が一回目)に、「在日社会の発展に貢献した功績」(毎日新聞「二〇〇八・二・四」)を認められ韓国国民勲章勲一等に相当する「無窮花」(ムクンファ)賞を受賞している。前掲のハンナ・アレントに倣えば、「無窮花」賞に「謝

意を表明する」張本勲やその同時代性を共有するわれわれは、その賞が内包している意味内容の「枠内でのみ行動すること」を「きわめて強く」「義務づけ」られる。つまり、むやみに張本勲を「在日社会の発展に貢献した功績」という名のもとで評価することは、張本勲自身が口籠りながらも語ろうとした「そうですねえ」が孕む問題をも捨象しかねないのである。まず、「枠」を外すべきである。そして、民族的アイドルという「枠」を形作る力学が何を包摂し何を切断了かを明らかにすべきである。「そうですねえ」と口籠る張本勲に焦点を当てることによつて見えてくる光景、それは「チョンヘンシン」の「モジモジ」と「P」の語る「現実」、そして申義雄の「怒り」や自分を「弱い人間」と語る顔無し顔の日常である。民族的アイドルというカテゴリーが無効化してきたこれらを想起し対話すること、それこそが「無窮花」賞を共有するわれわれの責任であろう。

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)